

11	小国 206
学 図	

文 部 省 検 定 済 教 科 書

財 団 法 人 教 育 図 書 研 究 会 編 修

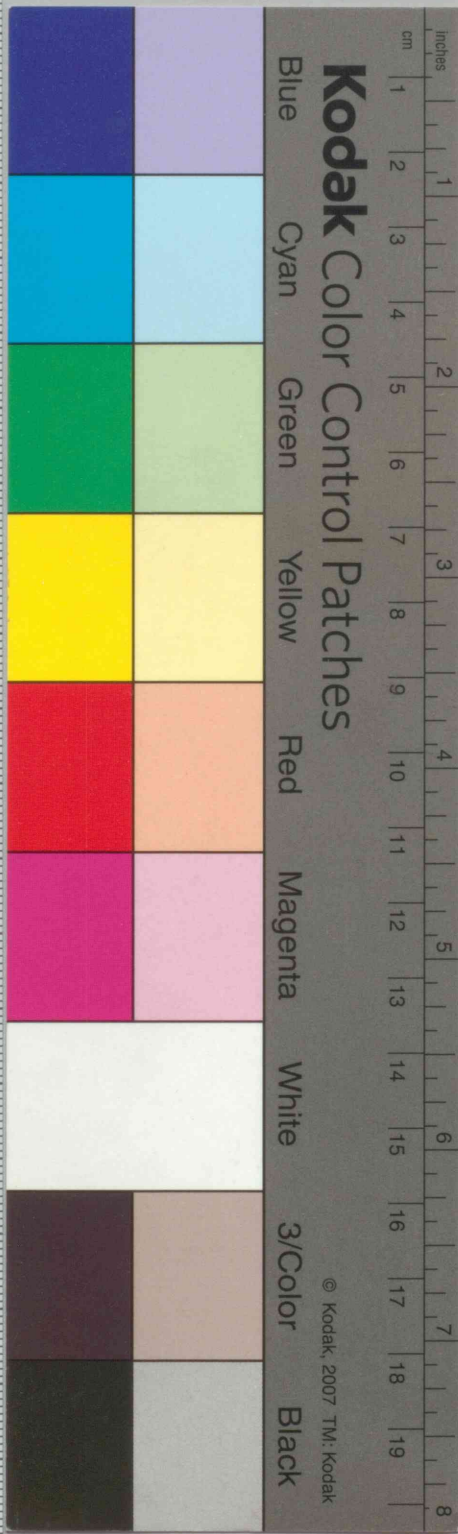
教科書文庫
5
810
34-1948
0130449587

二年生の

こくご
く
下

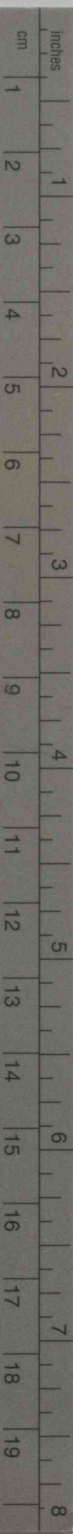


学校図書株式会社発行



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

50493

教科書文庫

5
810
34-1948
01304 49587



寄贈

教科書文庫

5

810

34-1948

0130449587

昭和二十三年九月十六日教育部核定済

二年生のこころ

学校図書株式会社

廣島大學
教育学部図書

0130449587



中央図書館

広島大学図書

0130449587





七、あかるい 日ざし

六十二

六、たみちゃんの やぎ

四十三

五、おたより

三十四

四、おとうとの ことば

二十九

三、おいしゃさんごっこ

十八

二、手

十四

一、ラジオで きいた話

四

もくろく





— ラジオで、きいた話

さあ、子どものじかんです。みなさん、ラジオのそばへよっていらっしゃい。—あつまってききましたか。しずかにおとなしくききましようね。

おまちかねの、お正月もはや三日になりました。みなさんはなにをしておそんでいますか。あててみましようか。

たこあげ、はねつき、こままわし、トランプ、かるた。

それに雪国の人は、スケート、スキー、そりあそび。

お正月は、やっぱりたのしいですね。

ラジオもみなさんのお正月をもっともっとゆかいにしてあげようと、いろいろおもしろいほうそうをしていますよ。きいていらっしゃいますか。

さて、きょうは、はじめにみじかいお話を二つ、そのつぎに、子どもの二十のとびらをいたします。それでは、「たこたこあがれ」というお話から始めていただきますよう。

男の子が たこを あげました。

「たこたこ あがれ 天まで あがれ。」
と 行って あげました。

たこは ぐんぐん あがりました。

男の子は どんどん 糸を くりだしました。

たこは すばらしく 高く あがりました。

おふろやさんの えんとつが えんぴつくらいにしか
見えないほどに とても 高く あがりました。

そんなに 高く あがったのに たこは もっと あが

ろうと しました。

しかし、もう 糸が ありませんでした。

あがりたくても あがれなく なりました。

たこは 糸を ぐいぐい ひっぱりました。

「そんなに ひっぱると きれて しまう。」

「きれれば いいんだ。きみが ひっぱって いるから

ぼくが あがれないんだ。」

たこは また つよく ひっぱりました。

もっと 高く あがろうと しました。



ぷつんと 糸がきれました。
ぐるんと たこはさかさになって あっと いう
まに ふきとばされて しまいました。



おもしろい お話でしたね。わがままな たこは どう
なりましたか。それでは もうひとつ、「ぞうの 目方」
と いう お話を ききましよう。

むかし、中国の ある 大きな 国へ 南の 国から、
一とうの ぞうを おくって ききました。

王さまは、大そう めずらしがって、はじめて 見る
この 大きな どうぶつの 目方を、しりたいと 思いま
した。

そこで 大ぜいの けらいたちを あつめて、どうした

ら、ぞうの 目方が はかれるか みんなの かんがえを
たずねました。

ところが、けらいたちは、がやがや いいあうばかりで、
ちっとも いい かんがえが 出て きませんでした。

すると、この 時 そこへ いちばん 小さい 王子
が、ちよこちよこと かけて きました。そして、なにを
いいあって いるのか、と たずねました。

「ぞうの 目方を はかろうと そうだん して いるの
だ。」

と、王さまが いいました。すると 王子は、

「なんだ、そんな ことなら
わけないでしょう。」

と いった わらいました。

みんなは かおを 見あわせ
ました。王さまは、

「では どう するのか。」
と たずねました。

「ぞうを 大きな ふねに の
せます。」

そして、ふねの ぬれたと



ころに しるしを つけて
おきます。

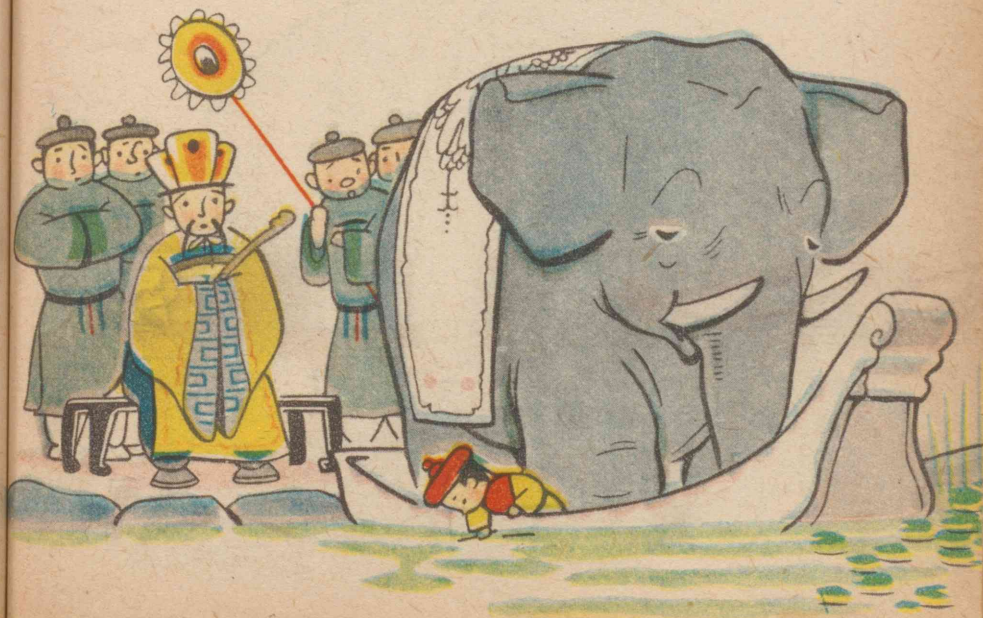
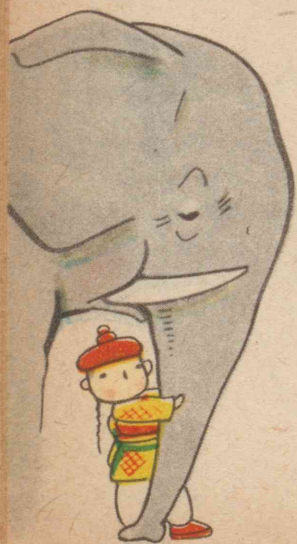
こんどは、ぞうを おろして
さつき しずんだ ところま
で にもつを つみこみます。
そして、つみこんだ にもつ
を、ひとつ ひとつ はかり
に かけます。ぜんぶで い
くらに なるかを しらべる
と、ぞうの 目方が わかる

でしょう。

王子に おしえられた みんなは、すっかり かんしん
しました。

どうです、かしこい王子の くふうした ぞうの 目方
の はかりかたは わかりましたか。

それでは これで お話 二つを おわって、つぎは、
おまちかねの 二十の とびらです。

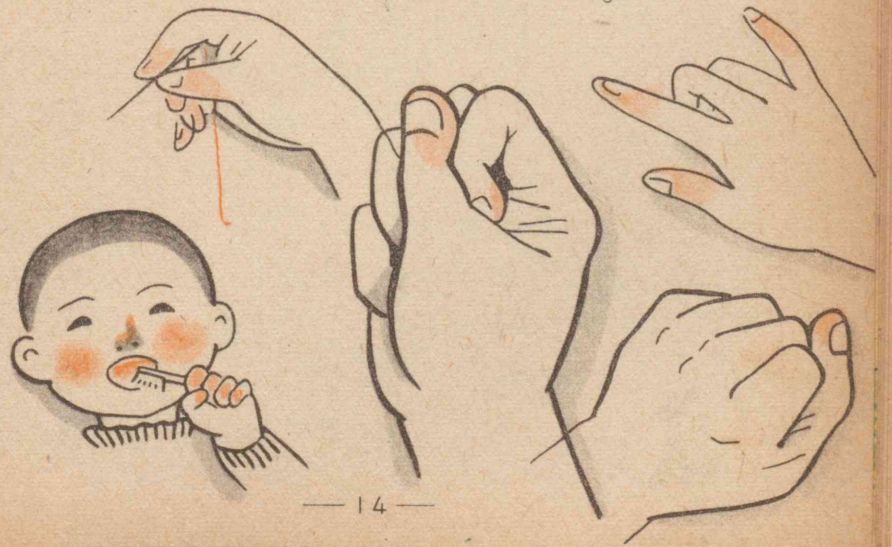


二 手

あなたの手はどんな手ですか。
その手ではをみがいていま
すか。くつもみがけますか。かいても
のやおそうじなどのおてつだいも
できますね。

たんぼやはたけをたがやす

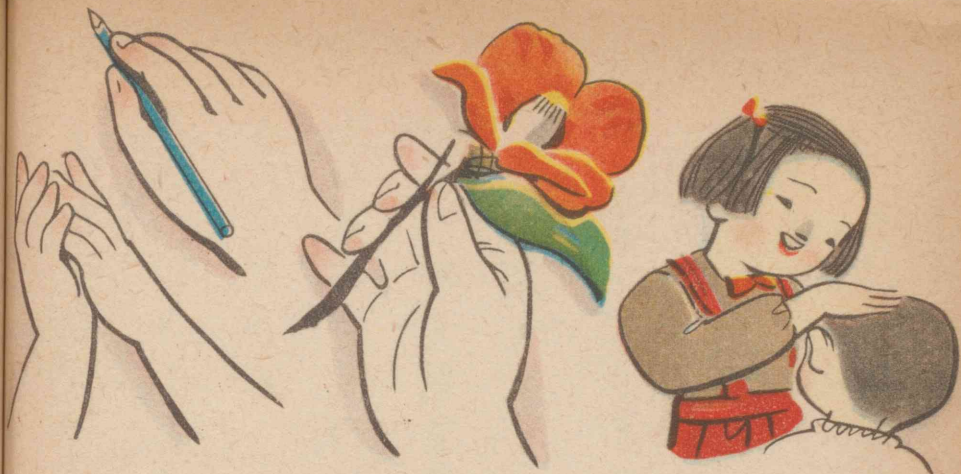
時、すきやくわをにぎる手です。ハンマーをふり



あげる手、カ いっぱい うちおろす手、タイプライ
ターのキーを たたく手、ピアノを ひく手、なん
でもできる しっかりと した手に しよう。

わるいものと いいものを まちがいなく よりわ
ける手、花をつんだり、くだものを もいだり、やさ
しく あたまを なでて やったり、ゆりかごを そっと
ゆすぶって やるような、そんな手に して ください。

ぶらんこの つなを にぎる手、かなぼうに ぶらさが
る手、自動車の ハンドルを うごかしたり、ボートを



こいだり、うまの たずなを ひくこと
も できるような、そんな 手に して
ください。

じょうずに えも 書ければ、しっか
りと 字も 書ける。ねんどを こねて
犬や 人や いろいろなもの を こし
らえられる。おにんぎょうの きもの
も ぬえれば、パンも やける、そんな
手。

うつくしい おんがくを きいたり、おもしろい お話
を して もらった ときには、パチパチと はくしゅ
しましゅう。

そして、さんぽに いく 時には、 みんなと なかよ
く 手をつなぎ、夕方の 空を ゆびさして、ああ、あ
の 星を ごらんと、いう ような そんな 手に して
ください。

あなたの 手は どんな 手ですか。



三 おいしゃさんごっこ

みのる「ふみ子さん、あそびましょう。」

ふみ子「なにを して あそびましょうか。ああ、そうそう

おいしゃごっこ どう。」

みのる「やろう。だれが びょう気に なるの。」

ふみ子「わたしの おにんぎょうさんよ。」

みのる「にんぎょうの びょうにんか。じゃ、おいしゃさん
は。」

ふみ子「そりゃ、みのるさんよ。男ですもの。」

みのる「ぼく できるかな。」

ふみ子「やって ごらん、きつと できるわ。」

ふみ子さんは、となりの へやへ にんぎょうを と
りに いきます。

ふみ子「じゃ、はじめましょう。みのるさんは、となりの
へやから はいって くるのよ。」

みのるさんは となりの へやに はいって いきま
す。ふみ子さんは、にんぎょうを ざぶとんの 上に
ねせつけて、ふろしきを かけて やります。

みのる「ごめんください。」

ふみ子「はい、おいしゃさまですか。」

みのる「はい、そうです。ごびょう

にんは どちらですか。」

ふみ子「こちらです。」

ふみ子さんは、みのるさんを

つれて、にんぎょうの まく

らもとに すわります。

ふみ子「この 子です。」

みのる「どんな ぐあいですか。」

ふみ子「どうしたのか、ねつが 出

て くるしむのです。よく みて ください。」

みのる「ねつを はかって みましょう。」

「なにか たいおんけいにする ものはないかな。」

と、ひとりごとを いいます。そこで ふみ子さんが、

「あ、えんぴつが いいわ。」と 言って ふでばこか

ら、えんぴつを 出します。

みのる「さ、ちょっと ねつを はかりますよ。」

そう 言って えんぴつを にんぎょうの わきの

下に はさみます。

みのる「みやくも はかって みましょう。」



みのる 「どれ、口を あけて したを 出して ごらん。」

この とき、ふみ子さんが 大きな 口を あけて、
したを ぺろりと 出したので、みのるさんが わら
いました。ふみ子さんも わらいました。

みのる 「あ、たいおんけいを 見ましょう。」

えんぴつを 出して 見て「おう 高い ねつ。」

ふみ子 「なんどですか。」

みのる 「九十ども あります。」

ふみ子 「あら、いくら 高いたって、そんなに ある こ
となんか ないわ。」

みのる 「いや、あがるとも、もっと あがるよ。」

ふみ子 「そんな こと あるものですか。いちはんあがって
も たしか 五十どぐらいだわよ。」

みのる 「そんな ことは ないよ。」

ふみ子 「ちがいますよ。」

ふみ子の
おかあさん 「なにを そんなに いいあって いるの。」

ふみ子 「ね、おかあさん。ねつが 高いって なんどぐらい
なの。」

おかあさん 「まあ、せいぜい 三十九ど。もっと あがっても、
四十どぐらいよ。」

みのる 「ふみ子さんがね、五十ど
も あるなんて いうん
ですよ。」

ふみ子 「みのるさんたら、九十ど
も なんて。」

おかあさん 「へえ、九十ど。たいへん
たいへん。おほほほ。」

「さ、これは おやつです。」
と 行って、りんごを 二つ おいて
いかれます。

ふみ子 「こんど、わたしが おいしやさまに
なるわ。」

みのる 「女の おいしやさんって あるかい。」

ふみ子 「あるじゃないの、ほら、よこちよりの じよいさん。」

みのる 「あ、そうか。じゃ ぼくが おかあさんかい。」

ふみ子 「あら、男の おかあさんて ないわ。おとうさんよ。」

みのる 「よし、ぼく おとうさんになる。」

ふみ子さんは、となりの へやへ いきます。すると、
みのるさんは、でんわを かける まねを して、

みのる 「もし、もし。」

ふみ子 「はい、はい。」

みのる 「うちの子が、ゆうべから びょう気になつたの



です。」

ふみ子「どんな ようすですか。」

みのも「ねつが 三十九ども あるのです。」

ふみ子「それは たいへんですね。すぐ まいります。」

みのも「たいへん 早かったですね。」

ふみ子「大いそぎで きましたから。」

どれどれ お子さんは。」

ふみ子さんは、そちらを 見

て なにか さがして いま

す。みのもさんが「なにか

ないの。」ときくと、「ちようし

んきが ほしいの。」と いいま

す。「あ、だしんを しましよ

う。」そう 行って、ふみ子さ

んは にんぎょうの むねを

とんとん たたきます。

みのも「どんなふうですか。なんの びよう気ですか。」

ふみ子「はいえんかも しれません。かわいいそうに。」

ふみ子さんは、にんぎょうを だいて 立ちあがり

こもりうたを うたいます。



みのる 「おいしゃさん、おいしゃさん。」

ふみ子 「——。」

みのる 「そんなに おこして、うごかして いいのですか。」

ふみ子 「だって、かわいそうだわ。ほら、ねむりかけた。し

ずかに しずかに。」

こもりうたを うたいつづける。

みのる 「おいしゃさんだか、おかあさんだか わからないや。」

ふみ子 「ほんとうね。わたし、やっぱり おかあさんが い

いわ。」

四 おとうとの ことば

「ポポー、ガタン ガタン、ポポー、

デンキキカンシャ、トンネル ハ

イルンデスヨー、

アカイ デンキガ チユイテル。」

おとうとは、こんな ことを い

いながら、ひとりで いっしょうけ

んめい あそんで います。

おとうとは、まだ よつつですけ



れど、もう、たいていのことがいえます。

「デンキガ チュイテル」というように、まだすこし口がまわらないところもありますが、もう「デンキヤ」などといわなくなりました。前には、「デンキヤ デンチャ」といって、いたので 私たちも、

「ほら、ひろむちゃん、デンチャ デンチャ」などと、いって、いきました。だんだん、そう、いわなくなり、なりましたので、私たちも、もう、「デンシヤ」ということに、しました。

「ウサギ」を「ウシヤギ」といって、いたことも、あります。

「ゴハン」のことは、「ゴファン」というように、いきました。「オハシ」も、「オフアシ」というように、いきました。

もとは、「アカイ デンキ チュイテル」というように、あいだの「ガ」は、いいませんでしたが、このごろは、「デンキガ」というようになりしました。

「おたくの お子さんは よつつですか。とても はつきりして、いらっしゃいますね。」

と、よく きんじよの 人が、いいます。

ブウブウ

モウモウ

キントト

ワンワン

と　いう　ようなのも、もう　すっかり

いわなく　なりました。

わたくしたちが、

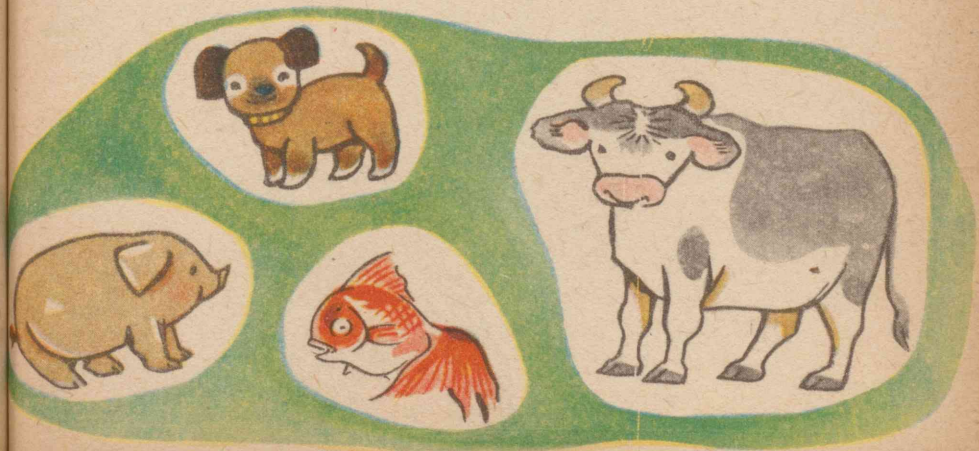
「ワンワン、ワンワン、ワンワン　きた。」

と　いっても、

「犬が　きた。どこ　どこ。」

などと　いいます。

きんじょに　おとうとより、ひとつ　年上の　ぼっちゃ
んが　いるのですが、おとうとの　方が　ずっと　よく
しゃべります。ことばも　せいかくです。うちでは、小さ
い　ときから、気を　つけて、せいかくな　ことばを　お
しえたからだ　と　思います。



五 おたより

一 雪国から

みなさん、お元気ですか。二学期の おわりに お
わかれしてから、もう ずいぶん 日が たちました
ね。

ぼくは こちらに うつつて まもなく かぜを
ひきました。それを こじらせて、学校を 長く 休
みました。びょう気ちゅう、みなさんから いただい

た おたよりを たいそう うれしく まみました。で
も、もう すっかり よくなりました。

こちらは、まい日 雪が ふっ
て います。もう ニメートル半
ぐらいは つもって います。

ときどき やねに つもった
雪を おろすので、家の まわり
には、もっと たくさん つもって
います。それで、道から、二かい
に、出はいり できるほどです。



ラッセル車も、もうなんかいか 出ました。
雪国の子どもたちは とても 元気です。こたつ
には いった さむがって いる 子どもなどは い
ません。

大きな人は みんな スキーを します。休みの
日などには、町の人も たくさん くるので スキ
ー場は たいへん にぎやかです。三年生、四年生 ぐ
らいの 人でも、きゆうな 雪の山を やの ように
すべって います。

ぼくたちは、えに 書いたような そりに のって



の れんしゆうです。なかの いい 友だちと 雪の
山へ 出かけます。しりもちを ついたり、ひどく

この 雪の 山を すべりま
す。スキーほど 早くは あ
りませんが、雪の 上を す
べるのはとても ゆかいです。
でも、やっぱり 早く、

スキーが やりたくて、どう
ぐを かって もらいました。

このごろは、まい日 スキー、

ころんで、雪だるまに なったり する ことも あります。ぼくらは、へい気で すべります。一日じゆう やって、いても、あきる ことは ありません。しかし、南の みなさんに、この おもしろさを おしらせする ことは、なかなか できません。友だちに 書いて もらった えを、三四まい 入れて おきます。この 手紙と、いっしょに見て ください。さようなら。

かとうよしお

二年生の みなさんへ

二 南の 国から ーへんじー

お手紙 ありがとう ございました。ごびょう気だったそうですね。でも、すっかり 元気に なったそうですね。よかったですね。私たちの 組は みんな 元気で 学校に かよって います。

そちらは、まだ 雪が ふって、いる そうですね。こちらは、もう ずっと 前に うめの花が さきました。ぽかぽかと あたたかい 日には、あ、もう 春が きたのかなと 思う ことも あります。二三

日前、だれかが「ひばりが ないてたよ。」と 話して
いました。学校の つばきの 花も さきは

じめました。

きよ年の 秋、みんなで か
だんに うえた すいせんは、
もう つばみを つけて いま
す。チュウリップは、かわい
い 芽を 出して います。

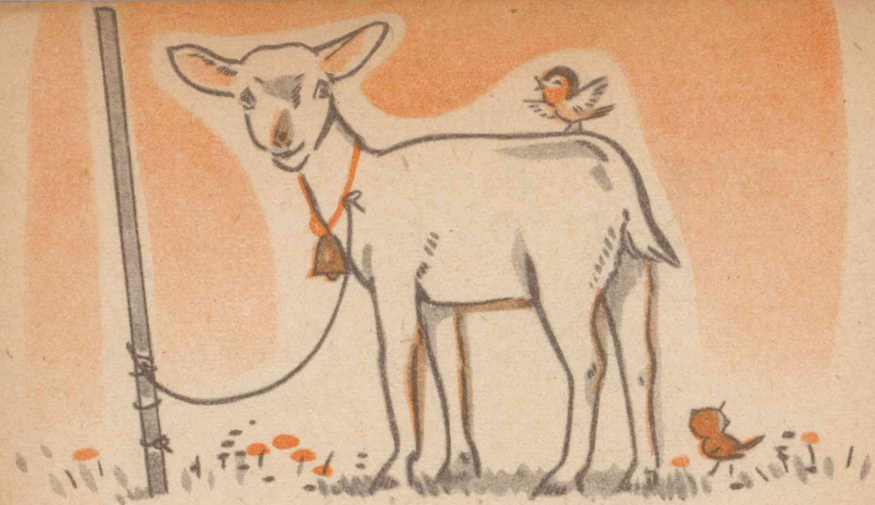
雪の 山で、そりに のって
あそぶ おもしろさや、スキー



の ゆかいな ことを しらせて いただきましたが、
私たちには よく わかりませんでした。

でも、きのう 学校で 雪国の えいがを 見まし
た。ちょうど、あなたから いただいた あの お手
紙に ついて、先生と みんなで 話あいを した
あとだったので、お手紙も えいがも よく わかっ
て、いっ べんきょうに なりました。

ふかい 雪に とじこめられて ねむって いる
町や 林、雪の 丘に 二本の きれいな せんを
ひきながら すべって おりる スキー。ラッセル車



—
たみちゃんの 家には、一ぴきの や
ぎを かって います。よく ちちの
出る おとなしい やぎです。やぎの
ちちは あかちゃんとおばあさんが
のみます。おとなりの あかちゃんにも
わけて あげます。ときどきは、しんる
いの うちからも もらいに きます。

かとうよしおさん

六 たみちゃんの やぎ

の ものすごいかなど よく わかりました。
そりで あそぶ 子どもたちが うつつた 時に
は、みんな 目を さらのように して、あなたを
さがしました。
あたたかい 南の 国の 冬も いい ですが、雪
国の 冬も すこし うらやましく なりました。
もう すぐ 学びい会なので、げきや おんがくの
れんしゅうを して います。さようなら

本田 道・子

やぎは、いつも すぐ ちかくの 林の そばに つな
いで おきます。

二

きょうは 日よう日です。たみちゃんは やぎを つれ
て 森へ いきました。たみちゃんは、やぎの つなを
といて やりました。自分は きりかぶに こしを かけ
て、やぎの ばんを して いました。

やぎは、つなを といて もらったのが うれしいので、
ときどき メエ メエと なきながら、あっち こっちの
草を たべて います。たみちゃんは 持って きた あ

みものを 出して、あかちゃんの くつしたを あみはじ
めました。

やぎは、ときどき 目を あげて たみちゃんを 見ま
す。一だん ぐるっと あんで しまうと、
たみちゃんは 目を あげました。やぎの
目と たみちゃんの 目とが であいまし
た。

「あら、あんた、わたしの 方を見て
いたの、やぎちゃん。」
やぎは うれしそうに 目で へんじを



して、「メエ メエ」と なきました。

三

たみちゃんは、ポケットを きぐって いましたが、くつしたの あしくびに 入れようと 思って いた 青い糸を わすれた ことを 思い出して うちへ ところに 行って こようと 思いました。

「たみ子、ちよっと 糸を とり に 行って くるの。

その あいだ、あんた、どこへも いかずに、ここに おとなしく して おれる。どう……」。

たみちゃんが ききますと、やぎは よく わかったよ

うな 目つきを して、「メーエ」「メーエ」と なきました。

たみちゃんは、やぎの 気もちが わかって いるし、やぎにも たみちゃん の 気もちが わかります。

ちよっと ふりかえって 見て、とんとん かけて いく たみちゃんを

見おくって、やぎは また「メーエ」「メーエ」と なきました。



森の小鳥たちは、えだから えだへ とびまわったり、
地面に おりたり、 時には、 やぎの せなかに とまっ
たりして、 たのしく うたって います。

その 時でした。 一ぴきの ほかの やぎが ことこ
とと 足音を させて、 森の 中から 出て きました。
小鳥たちは、 これを 見ると、 みんな 木の えだに
まいもどって しまいました。

「あんた ひどりで いるのかい。」

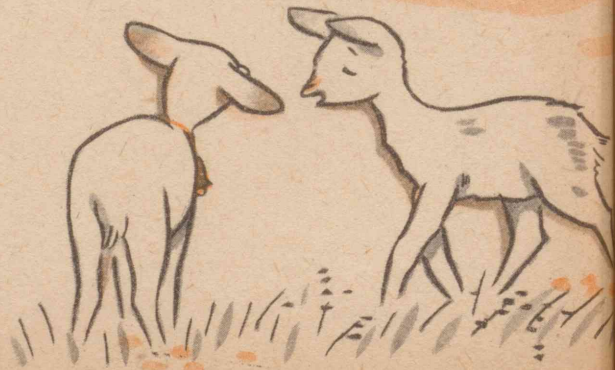
「ええ、おじょうさんが ちよつと かえったから。」

「どうして つながれて いないんだ。」

「わたし おとなしい やぎで どこへ
も いかないからよ。」

「ふーん、つながれて いたら しかた
が ないんだけど、 つなを とかれ
たら、 にげて いかないのは そんだ
よ。」

「それで、あなたは どっかから にげて きたのね。」
「だって、このごろ なんにも くれないうし、いい 空気
だって すえないから、 つなを きって ここまで き



たのき。」

「でも、あんまり かってな ことは、しない ほうが
いいわ。」

この 時、うしろの 方で、人の 足音が しました。
よそから きた やぎは、その 方を 見ると、すぐに
わきを むいて、いきなり はんたいの 方へ かけて
いきました。

五

やぎは、たみちゃんの かえりが まちどおしいのか、
ときどき、「メーエ」「メーエ」と なきました。

その 声を ききつけたのか、大きな きたない 男の
やぎが、のそのそと あるいて きました。

「ここには、いい 草が たくさん あるね。」

「ええ、いい 草が ありますよ。こっちへ よって お
あがりなさい。」

しんせつに たみちゃんの やぎが いうと、

「ああ たべるよ。これは みんな おれの ものだよ。」

「まあ、どうしてですか。」

「ここに あるのは みんな ぼくの ものだよ。さあ、
あっちに よって くれ。」

「でも……」。

「でもじゃあ ないよ。あんたは、もう さっきから、

ぼくの 草を たくさん かってに たべたのだから。

ぐずぐずして いると、ひどい 目に あわすよ。」

たみちゃんの やぎは、はらが たちました。しかし、

けんかは いやですから、すこし はなれた ところで

草を たべて いました。

「そこだって ぼくの 草だよ。ずっと あっちへ いきな。」

しかし、この やぎの いう ことを、いちいち きく

のは いやでしたから、だまって みじかい 青い草を

たべて いました。

すると、その やぎは きちがいのよ

うに おこって、つのを 立てて、どし

んと つきあたって きました。たみち

ちゃんの やぎは、それを ちよつと よ

こに かわしました。よその やぎは

一メートルほど むこうへ、とんで い

立ちなおろうと しました。そこは が

いたので、ころころと ころがって、下の



けに なって いたので、ころころと ころがって、下の

方へ ころげおちて しまいました。

メメメー メメメー

かなしい 声を しぼって、おちて いくのを きくと、

たみちゃんの やぎは、やさしい 声で、

メーエ メーエ

と、よんで やりました。

六

たみちゃんの やぎは、しばらく 草を たべて いま
したが、ころげおちた やぎが、きつと ひどい けがを
して いるに ちがひ ないと 思うと、きのどくに な

って ききました。

まわり道を して、おちた 方へ 行って 見ました。

そこらは、一めんの ささやぶで、大きな 石ころが

ごろごろ して いました。どこかで、くるしそうな う

めき声がありました。さっきの やぎが、けがを して

いるに ちがひ ありません。

うめき声の する 方へ、ちかよって みると、そこに

は、一ぴきの 子やぎが ねて いました。

「おや、子やぎさん、どうしたの。」

「ああ、ぼくは しにそうだ。もう 三日も おちちを

のまないんだもの」。

「そう、それはきのどくだね。わたしがあげましょう。」
そばに よって、ちぶさを ふくませて やりました。

子やぎは、うれしがつて、ごくごくといきも つかずに のみました。

しばらくすると、子やぎは ちちくびを はなして、また だまって、かた方の ちちくびを くわえました。

「いいよ。えんりよ しないで。三日ものまなかつたのですもの」。



子やぎは、いたずらそうな 目を、ぱちぱち させて、うれしそうな あいずを しました。

りょう方を すいおわると、ちちくびを はなして、「おばさん、ありがとう。ぼく、よの中って、どんなところか 見たかったのだよ。それで、こんな とおくまで きて しまったの。ありがとう。もう おうちへかえります」。

「だって、おうちが わかるの」。

「わかりますよ。なんでも あっちの方から きたようだ」。

子やぎは よろこんで、どんどん かけて いきました。

七

たみちゃんの やぎが、さか道を かえりかけると、また、一ぴきの わかい やぎが 出て きました。足には、ニメートルぐらいの つなを ひきずって います。

「おい、女の やぎさん。どこへ いくのだい。」

「わたしは たみちゃんの ところへ いくのよ。」

「おまえさんには、つなが ついて いないじゃないか。」

「かわいそうな やぎの おみまいに いったのよ。」

「そうかい。そりゃ かんしんだ。しかし、やぎに 生れ



って その ちちを うったら、きつと もうかるよ。」

「わたしは、そんな しょうばい きれいのよ。この おち

ちは、うちの あかちゃんとおばあさん、となりの

あかちゃんを じょうぶにする だいじな おちちです。」

「でも いまに こうかいするよ。いまが いい ときだ。
さあ、ふたりで 出かけよう。」

そう いった いる とき、さっきの 小鳥たちが、空
から まいおりて きて、なきたてました。

「あ、たみちゃんが きたのだわ。しつれい します。」

ハ

「ごようが あったので、たいへんおそく なったのよ。
わたしを さがして そんな 方へ いったの。」
たみちゃんが やぎの あたまを なでて やると、い
たずらを して いた ところでも 見られた ように、



手を たみちゃんの ひざに おき、ほ
おを こすりつけて あまえて います。
雲の かげから、お日さんが よこ目
で ちよつと わらいました。

また 小鳥たちが あつまって きま
した。

おち葉も、そよ風に ふかれて まい
あがり、みんなでおどったり、おどくいの うたをう
たったり しました。なんと いう のどかな、あったか
い 春さきでしうか。

七 あかるい 日ざし

あかるい 日ざしが、

きょうしつの中ほどまで さしこんで いる。

みんな だまって えを 書いて いる。

「ほたるの 光 まどの 雪」

よく そろって うた声が きこえて くる。

あたたかな 日ざしが、

ぼくの つくえにも さして いる。

クレヨンが ゆびさきにおう。

「ふみよむ 月日 かさねつつ」

ぼくにも もう すぐ 三年生だ

ぼくは たのしかった 学び会の

えを 書いて いる。

二年生も もう あと わずかだ。

三年生、三年生、

また「ほたるの 光」が きこえて くる。



Copyright 1948, by
The Kyōiku Tosho Kenkyukai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors.

小国206

二年生のこくご 下

Approved by Ministry of Education
(Date Sep. 10, 1948)

感謝
左の作品を本書に掲載させ
ていただきましたことについ
て、著作者諸先生に心から感
謝をいたします。

たこたこあがれ……平塚武二氏
手……平塚武二氏

編者

東京都文京区大塚窪町
東京高等師範学校附属小学校内
理事長 東京高等師範学校教授
担当執筆 東京高等師範学校教諭
財団法人 教育図書研究会

佐藤保太郎
田中豊太郎
花田哲幸
青木幹勇
森下忠治
小林義雄

表紙とさしえ

田原輝夫

印刷 昭和二十三年九月十日
発行 昭和二十三年九月十四日

定価 四

著作者

財団法人

教育図書研究会

発行者

会長

業務台理作

印刷者

代表者

川口芳太郎

発行所

学校図書株式会社

東京都港区芝三田豊岡町八番地

本書の指導書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のもの無断發行を禁ずる。

芽 (40) 王 (9)

森 (44) 動 (15)

面 (48) 休 (34)

雲 (61) 半 (35)

葉 (61) 場 (35)

Faint, illegible text within a rectangular border at the top of the page, possibly bleed-through from the reverse side.

広島大学図書
01 0130449587
